

化粧を用いた唇裂口蓋裂の女性への支援

日比野英子（京都橘大学健康科学部）

萩尾 藤江（関西医科大学形成外科学講座）

楠本 健司（関西医科大学形成外科学講座）

〈問題と目的〉

ヒトの子は運動能力がきわめて未熟な状態で生まれてくるが、それゆえに親を惹きつけ、親に世話をさせるための社会的コミュニケーション能力が優れているといわれている。社会的コミュニケーションの手段として顔を見ることがあるが、これについて、Fantz,R.L.(1961)は乳児が選択的に顔を注視することを実証し、Melzoff,A.N. & Moore,M.K.(1977)やFields,et al.(1982)は新生児や乳児が成人の表情を模倣する能力があることを明らかにしている。

また、近年盛んになってきた顔認知機能の研究結果から、ヒトの顔認知の際に選択的に局所脳血流が増加する部位として紡錘状回顔領域や後頭側境界部顔領域や後部上側頭溝顔領域などが同定されている(永福、2013)。

これらの知見は、人は生来顔に注目するように生まれてきて、顔を見ることが他の事物を見ることがとは異なる特別な認知システムを有していることを示しているといえるだろう。新生児にとって母親の顔を他の顔と見分けることは非常に重要なことであろうし、成長してからも多くの人々の顔を区別する能力を損なうと社会生活がきわめて困難になる。私たちは顔に敏感にならざるを得ない。人間にとって、顔は自己を代表する特別な身体部位であり、顔は視覚世界の中でも特別な対象である。

このような顔に何らかの瘢痕や奇形などがある場合、その人の心理面や社会生活にどのような問題が生じるだろうか。

唇裂口蓋裂は、口唇や口蓋が融合することなく出生した状態の疾患である。この疾患は先天奇形

の中でも最も頻度が高いものの一つで、600人に1人の割合で生まれる(楠本、2006)。治療は、胎児期から少なくとも青年期に至るまで、産科、形成外科、口腔外科、歯科、小児科、耳鼻科、などの複数の診療科にまたがって、段階を追って続けられる。胎児期に出生前診断と告知が行われ、出生から3か月の間に哺乳・育児指導を実施、ホツツ床を作成し口と鼻を遮断してうまく呑みこめるようにする。生後3か月頃に、口唇形成術、外鼻形成術、外鼻孔形成術などの手術、1歳を過ぎる頃には口蓋形成術をうけて、その後に異常構音があれば言語指導が開始される。上顎の発達が下顎の発達に比べ遅く、そのために反対咬合になったり、歯の欠損があるために歯列矯正も行うことが多い。学童期・思春期以降随時に、美容目的の口唇形成術や外鼻修正術などの二次形成手術を受けたりもする。唇裂口蓋裂の患児と親は、一定期間このような治療を、親子二人三脚で受けていくことになる。このように、今日では、医学的には治療が確立された疾患であるが、幾度かの手術の後、機能的な問題が解決された後でも顔に特徴的な傷痕が残る。顔は個人を代表する部位であり、他者からの視線が避けられない部位である故に、患者の心理・社会的な課題として、幾度かの手術で変化する自身の顔をどのように受け入れていくか、外界へどのような姿勢で適応していくのかという深大な問題が横たわっている。

両親は長期にわたる治療のために多大なエネルギーを費やし、折々の心労が重なり、経済的にも負担がかかる。生まれた直後に母親が乳児の顔の外表面奇形に大きなショックを受けたり、授乳の困難に立ち向かうという不安の大きい養育が始まる。親の不安の大きい養育が患児自身に与える影響は、この疾患の齎す二次的問題・三次的問題として捉

えられる(日比野ら、2010)。乳児にとって、哺乳は単に栄養摂取のみを意味しているのではなく、母親との情緒的コミュニケーションを相互的にやり、生来のコミュニケーション能力を発達させ、愛着の基盤を形成していくための交流の機会と考えられる。しかし、患児の場合、乳を吸って飲み込むという作業が困難で、少量飲んで疲れて眠ってしまい、母親は一日中乳を飲ませることばかりに必死で、わが子を「かわいい」と思うゆとりもないといった状況が続く。患児は母親の不安な顔ばかり見て育つことになる。このことが患児の情緒の安定性に影響を与えるという可能性も考えられる。

患児が幼稚園や保育所等の集団に入ると、ほとんどの子どもが顔のことで他児からからかいやいじめを受ける経験をしている。このことを親に告げると、親が悲しそうな表情を浮かべるので、患児の中には2度と親に話さないようになる子どもも少なくない。さらに長ずると、他のきょうだいよりも養育にエネルギーとお金をかけてもらっている、これ以上負担をかけたくないという気持ちが生じ(京都口友会、1997)、本当の情緒や欲求を抑圧する機制を身に着けてしまうことも考えられる(河原、1991)。

親は患児の将来を考えて職業的自立を強調しがちで、実際に専門的な職業人へと成長された例も多々見られる。その一方で、この疾患について話題にすることについては、積極的な家庭とあえて回避する方針の両極端の家庭が見受けられる。どちらの方針でも「外側よりも中身が肝心」という、有能であることに価値を置き、「顔」や「外見」には価値を与えない態度が形成されると考えられる。日比野ら(2005)は、質問紙調査によって、唇裂口蓋裂の成人女性は、仕事や人間関係についての有能さを重視し、外見を飾ることに抵抗があり、外見を気にする人や情緒が不安定な人ほど他者から注目されることを回避する傾向が強いことを見出した。

親の気持ちを慮って「疾患」や「顔」について棚上げにしてきた子どもも、思春期・青年期にさしかかると自己意識の高まりとともに、自己の外見についても意識せざるを得なくなると考えられる。日比野ら(2010)の研究でも、数回の二次形成手術の後もやはり鼻(77%)や口唇(77%)を内心気

にしていることがうかがえるが、親や主治医にはそれを言えない人が多く見られた。気になるが、価値を認めていないものを欲することは自己否定に繋がるので表明できない、恥ずかしいことのように思ってしまうのである。この延長線上に、「自分はおしゃれしてはいけないと思っていた。」「おしゃれを意識するとかえって抑うつ的な気分になってしまう。」という抵抗感を語る表現や、化粧や服装などのよそおい・おしゃれは自分には無縁のものである、あるいは自分は意に介してないと振る舞う態度が現れる。成人にも、外見に関心があるということを他者に知られることを恐れる心性が根強く残っている。

実際には、唇裂口蓋裂の女性の化粧品使用度は一般女性と有意な差がない(日比野ら、2005)にもかかわらず、患者の女性は化粧という行為を、自己を慈しみ励ます手段(阿部、1994)として用いていないことが窺える。これまでの化粧の心理学的研究では、化粧には「創造の楽しみ」があり「外見的欠陥を補償」して積極的な自己表現や対人行動に導くという効果があることが報告されている(松井、1993)が、患者の女性にはこのように作用していないようである。メーキャップは手術後の瘢痕を目立たなくすることが可能で、しかも患者自身が習慣的に用いられる手段であり、患者が自己の顔と向き合い、慈しみ、受容するための手段として有効ではないかと考えられる。

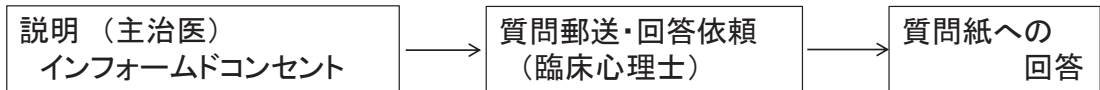
萩尾ら(2005)および日比野ら(2010)は、唇裂口蓋裂の女性に対して、医師・メーキャッパー・臨床心理士の専門家チームによる面接・化粧施術・化粧指導を通して、患者が自己の顔に対する満足感を高めながら、穏やかに顔と向き合い、気持ちの折り合いをつけて受容してゆくこと、さらにそれによってよりよい社会適応がもたらされることを目的に、化粧プログラムを実施してきた。本報告では、特にこの化粧プログラムによる自己意識や人格特性の変化を取り上げるとともに、特徴的な2つの事例について検討する。

〈方法〉

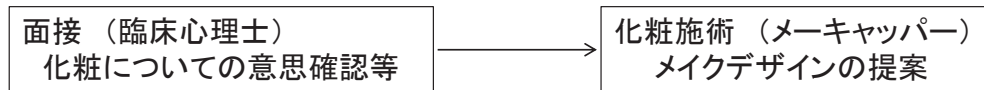
大学病院形成外科外来における化粧プログラム

2003年より、大学病院形成外科外来において、本プログラムを医師・臨床心理士・メーキャッ

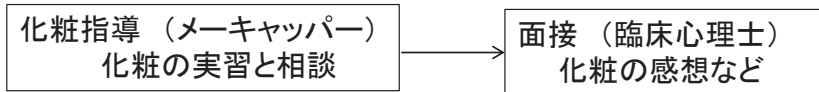
開始前



第1回 化粧施術と面接



第2回 化粧指導と面接（第1回から約1か月後）



第3回 化粧指導と面接（第1回より3－6か月後）

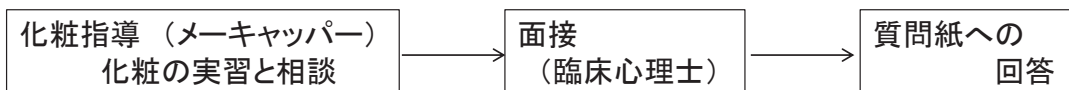


図1 形成外科外での化粧プログラム

パーが担当して実施しているが、本報告では初期に対象となった9名の結果を取り上げて検討する。

対象：唇裂口蓋裂患者の女性9名（16－42歳）

質問紙の構成：

- ・化粧習慣についての質問26項目
- ・顔についての質問2項目
- ・手術についての質問1項目
- ・化粧施術についての質問3項目
- ・化粧・装いに関する質問 自由記述
- ・化粧行動尺度16項目（日比野ら、2005）
- ・自意識尺度21項目（菅原、1984）
- ・Big5 尺度60項目（和田、1996）

手続き：

図1に示すように、本プログラム開始前に主治医より提案・説明がなされる。

患者が了承されたら、臨床心理士より質問紙を郵送して回答してもらい、第1回の化粧施術の日に持参してもらう。プログラムの第1回は、まず臨床心理士が対象者の化粧施術についての意思確認を中心に面接を行い、そのあとにメーキャッパによる化粧の施術が行われる。普段から化粧を施している患者は素顔をみられることに抵抗感が強く、化粧をしていない人も他者

の視線に緊張されるので、メーキャッパ以外の人がいない個室で施術実施した。メーキャップのデザインは、メーキャッパが患者の顔の特徴や服装にあったものを提案した。第2回は対象者自身がメーキャップできるように、実習形式で、対象者の希望も取り入れながら化粧指導が行われ、その後、臨床心理士による面接で化粧の感想等を話してもらった。その後、対象者に化粧指導の内容を日常生活で試してもらって約2か月から5か月後に第3回を実施した。第3回も実習形式の化粧指導と相談の実施後、臨床心理士による面接を行った。

約10年後の化粧施術・面接と質問紙調査

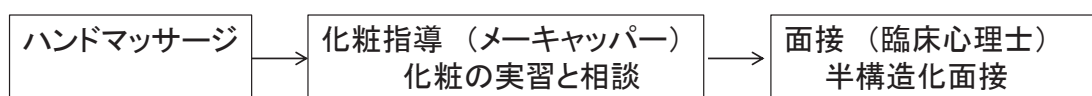
化粧プログラム対象者が体験後に自身の顔について、あるいは化粧・服装などのよそおいについてどのような意識を持つようになったかを調べるために、化粧プログラムの実施から約10年後に、2名の女性に対して、メーキャッパによる化粧施術と半構造化面接を実施した。

対象者：本プログラム体験者の2名

手続き：

対象者の緊張を和らげるために、ハンドマッサージを約15分施術後、化粧施術（約45分）を実

化粧プログラム(10年後の施術と面接)



質問紙調査(化粧施術・面接より1か月後)



図2 化粧プログラム(10年後の施術・面接・質問紙調査)

施し、その後半構造化面接(約40分)を行った。

面接の質問事項は以下の通り。

質問

1. 普段はどのようなおしゃれをされていますか。
2. あなたにとってよそおい・おしゃれはどんな意味がありますか。
3. ご自分の顔についてどのような思いがありますか。
4. これからどんなお化粧や髪型や服装をしてみたいですか。

〈結果〉

I. 各尺度平均値における化粧プログラム開始前と体験後(3-6か月)の比較

9名の対象者の化粧品使用度(スキンケア化粧品の使用度、メイク化粧品の使用度、メイク道具の使用度)、化粧行動意識尺度(3下位尺度:外見管理、情報話題、外見評価回避)、自意識尺度(2下位尺度:公的自意識、私的自意識)、Big5尺度(5下位尺度:外向性、情緒不安定性、開放性、

表1 化粧プログラム開始前と体験後(3-6か月後)の比較(N=9)

	開始前平均(SD)	体験後平均(SD)	t	p
化粧品使用度				
スキンケア化粧品	2.43(1.02)	2.86(0.69)	1.142	n. s.
メイク化粧品	2.35(1.12)	3.31(0.80)	3.261	p<.05
メイク道具	2.42(1.36)	3.25(0.71)	2.209	p<.10
化粧行動意識尺度				
外見管理	3.33(0.29)	3.48(0.71)	0.645	n. s.
情報話題	2.78(0.58)	3.28(0.72)	1.722	p=0.129
外見評価回避	3.48(0.88)	3.26(1.10)	0.61	n. s.
自意識尺度				
公的自意識	4.56(0.70)	4.59(1.31)	0.104	n. s.
私的自意識	5.37(0.86)	5.40(0.62)	0.096	n. s.
Big5				
外向性	4.53(0.92)	4.51(1.13)	0.085	n. s.
情緒不安定性	4.56(1.19)	4.36(1.03)	0.68	n. s.
開放性	4.02(0.76)	4.19(0.93)	0.538	n. s.
誠実性	3.85(0.52)	3.72(0.40)	0.927	n. s.
調和性	4.56(0.74)	5.10(0.96)	4.951	p<.01

誠実性、調和性)における得点の平均値について、化粧プログラムの開始前と第3回の体験後との間に対応のあるt検定を行った結果を表1に示した。

メイク化粧品の使用度が体験後に有意に高くなり($t=3.261, p<.05$)、メイク道具の使用度が体験後に高くなる傾向が見られた($t=2.209, p<.10$)。化粧行動意識尺度の下位尺度「情報話題」は、「私はファッション雑誌をよく見る方だ。」「私は友人と化粧の話をする。」などの項目を含むが、この尺度の得点が体験後に若干高くなる可能性が見られた($t=1.722, p=.129$)。また、Big5尺度の下位尺度「調和性」(温和な、親切的な、協力的な、素直な、寛大な等の項目)が体験後に有意に高くなった($t=4.951, p<.01$)。

プログラム体験後に、化粧行動が拡充し、化粧に関する記事を読んだり、話題にすることも増えたことが窺える。性格特性においては、穏やかで、他者に対して親切、協力的で寛大になるという、他者と好ましい人間関係が築きやすい調和性の上昇が示唆された。

II. 2事例の化粧プログラム体験と約10年後の面接の結果

1. 母親の厚い庇護からの「よそおいの自立」を模索し始めたAさん(53歳)

事例概要

原家族：

父(Aが中学生時代に死去)、母、兄、本人

家族：本人、夫、長男

生育歴：

地方の有力者の家庭に生まれるが、Aが中学生のころ父が他界。その後は母親の「手に職をつける」という方針のもと、大学へ進学し、医療系の専門職に就く。学生時代に唇裂口蓋裂者の集まりで現在の夫と出会い、7年間の

交際の末、結婚。母親は、最初その結婚に反対したが、結果的には母親の考えによって盛大な結婚式を挙げさせた。結婚後、他県の公務員となり、男児を儲けた。息子は、Aが子ども時代に目指していた高度専門職を目指して大学へ進んだ。Aは公務を懸命にこなすが、毎日のように残業が続く日々の中、2年前に悪性腫瘍で倒れ、手術は成功したものの、職を辞した。現在は回復に向かい、非常勤職に就いている。

夫は、現在も「Aは、何かこまったことがあると、いつもこの疾患のせいになってしまう。」と、Aの自らの人生を引き受ける姿勢の未熟さを指摘される。

化粧プログラムへの参加の動機：

有職時代のもっとも繁忙な時期に参加した。

そのころ、Aは、夫と息子の理解・応援を得て、連日残業の日々を送っていたが、その割に職場での評価はあまり芳しいものではなかった。Aが高価な化粧品を買い込んではいるが、ほとんど使いこなせていない様子を見て、夫が参加を奨めた。

Aの化粧プログラム体験

開始前の質問に対して「(化粧や服装は)大事なことだと思う。もっと自分に似合う髪型、化粧、服装を身につけたいが、できていない。」と答えており、メーカーによる化粧施術の体験後の感想は、「別人のよう。目のメイクでタヌキのように見える気がして、自分のイメージとは違い、恥ずかしい。」と記述している。Aはメーカーによる化粧のデザインが気に入らなかったようである。

Aの質問紙指標における変化

化粧品使用度は、プログラム参加後若干の増加傾向がみられ、外見管理への関心は10年後がより高くなっている。10年後において、化粧プログラ

表2 事例Aの各指標における変化

	スキンケア	メイクアップ	外見管理	情報話題	外見評価回避
開始前	2.33	3.00	3.67	3.00	3.33
終了後	3.78	3.50	3.33	1.80	4.67
約10年後	3.33	3.75	4.00	2.40	3.33

	公的自意識	私的自意識	外向性	情緒不安定性	開放性	誠実性	調和性
開始前	4.64	4.30	4.25	4.08	4.25	4.24	4.75
終了後	3.91	4.50	4.25	4.83	5.17	3.83	5.20
約10年後	5.45	6.10	5.00	4.18	5.12	5.24	5.75

ム参加当時よりも、公的自意識と私的自意識と調和性が顕著に高くなり、外向性と開放性も上がり、情緒不安定性がやや低下している。自己の外見と内面の両面への関心が強くなり、自分が他者にどのように見えているか、以前より気になるようで、他者に対しても気をつかうようになっていることが窺える。

10年後のフォロー面接でのAの語り

①普段のおしゃれについて

化粧は「転記」というか、ささっとしているだけ。あんまりおしゃれではない。母親がいろいろ心配して服を買って送ってくれる。でも、母とはちょっとセンスが違う。母は奇抜なはっきりしたものが好きだが、自分はおちついたオーソドックスなものが好き。母は洋服も毛糸の器械編みもでき、布団も自分で作る。私が小学校の時はすべて母の手作りの服だった。自分で選んだっていう記憶がない。あまり選ぶ力が育ってないって感じ。

②Aにとってのよそおい・おしゃれの意味

大切だと思うが、上手くできていなくて、得意ではない。

③自身の顔について

あまり自信ない。思春期に入ってから悩んだ。結婚はしたが、その後もずっと悩みがある。コンプレックスというのはずっとある。仕事とか子育てとか忙しいとあまり(意識しなかったが)、もう孫ができるくらいの年になったが、(孫のことも心配で)ずーと(コンプレックスを)もっていくのかなあと思う。

④これからどんな化粧・髪型・服装をしたいか。

今日、メイクしてもらってびっくりした。(スマートフォンの自分の写真を確認する。)なんか若い人みたい。もっと勉強して、自信をつけたい。立体的に見えるメイクを教えてもらったので、やってみようと思う。

2. 「よそおい」で心を護る習慣を得たBさん(42歳)

事例概要

家族：父親、母親、本人、弟

生育歴：

両親は2人とも専門性の高い職業人であり、社会的な事象にも意識が高い。Bの名は、障害

に負けないようにと、社会活動家の名前から命名された。唇裂口蓋裂の親の会にも参加し、中心的メンバーとして活動。Bも幼少時から講演会やリクリエーションの活動に参加し、知識を得、同じ疾患の仲間と交流した。

両親は、治療にも大変熱心で、唇裂の手術後も情報を集めて、名医といわれる医師のいる病院を転々とし、口蓋形成、唇の二次形成、鼻の形成などの手術を受ける。当時最先端技術であった顎の発育不全を治すための骨切り手術も受けた。舌の動きが悪く、発音不明瞭のため、5-8歳に言語訓練を受けた。

Bは小学校のころから顔のことでいじめを受けており、中高生になると「友達との間に疎外感を感じて、無理解な周囲に対しての怒りを感じ」、進路として司法の道を志したが、難関の国家試験で躓き、教育関係の職に就くが、体調を崩して事務職に転職した。この転職の前に、鼻の正中線をまっすぐにする形成手術を受けている。

参加前のBには化粧習慣があったが、家族や友人と顔について話をするとはなく、「服装も目立たぬようにしていた」「手術で顔をきれいにしたいと思う気持ちを医師になかなか話せない」状況にあった。そのころのBには、向かい合って話をする際に、正面に座った相手の顔をまっすぐ見ることができず、視線を相手に向けながらも顔を左に逸らす仕草が見られた。

化粧プログラムへの参加の動機：

国家試験の準備期間であった時期に本プログラムに参加した。「外(外出先のトイレなど)で化粧直しができない。」という悩みがあり、化粧品売り場などでも相談して購入することがなかなかできないと語っていた。安心して化粧を施術してもらって、自分にあった化粧法を指導してもらえる機会として本プログラムに参加した。

Bの化粧プログラム体験

Bは、プログラム参加後、化粧によって傷をカバーしつつ、「自分の顔の魅力的な部分を専門のメーキャッパーに指摘」してもらい、「手術のように専門家の手を借りることなく、フツウの女性として生き生きと生きる方法を見つけた」「(化粧は)この障害との、現実的な共存のあり方。」「(化

表3 事例Bの各指標における変化

	スキンケア	メイクアップ	外見管理	情報話題	外見評価回避			
開始前		3.13	3.33	2.00	4.00			
終了後		3.88	5.00	3.40	3.67			
約10年後	2.56	2.88	4.67	1.80	5.00			

	公的自意識	私的自意識	外向性	情緒不安定性	開放性	誠実性	調和性
開始前	4.00	4.70	5.00	5.50	5.50	4.58	4.50
終了後			3.67	3.83	4.25		4.83
約10年後	4.64	5.20	3.33	4.25	2.83	4.83	5.33

粧プログラムは)私のような漠然とした不安や、医療の限界を感じている人にとっては朗報」という感想を語った。その後、Bは、避けてきた医師への要望を表明し、美容整形の手法である、鼻の正中線をまっすぐにする手術も受け、おしゃれを楽しみだした。

Bの質問紙指標における変化

表3に示すようにBの回答には欠損値があり、変化を追えないものもある。

化粧プログラムを契機として外見管理への関心は増大したものの、化粧品の使用度には大きな変化はなかったと考えられる。プログラム体験後と10年後に、外向性は中程度の点数になり、他者にどのように思われているかについて以前よりも敏感ではなくなり、内向的な方向へ変化している。10年後には、プログラム参加前よりも公的自意識も私的自意識も高くなり、自己の外見と内面の両方に注意が向くようになり、開放性が下がり外見評価回避が高くなって、一見他者を避けているように見えるが、内向きになることで情緒の安定性が増し、調和性も上昇して他者にはむしろ寛大になったことから、周囲の人々ともうまく折り合いがついているように窺える。

10年後のフォロー面接でのBの語り

①普段のおしゃれについて

化粧より服が多い。通勤に使えるおなしい服(を選ぶ)。

②Bにとってのよそおい・おしゃれの意味

仕事をしているのでキチンといったものを意識する。(服は)嫌いじゃない。気分とファッションは関係していると思うので、テンションのあがるものとか、きびきびした感じのものとか、わりに意識している方だと思う。雑誌とか見るのも好き。髪も縮毛をなおすのに結構お金かけて、不快な感じを与えないようにしている。以前の

職業の影響があり、いつどこで誰にであっても大丈夫なように洋服には気を付けている。今の職場では、更衣室で「なんでそんなにキチンとした服なの」「ほかの人と雰囲気違うね」って言われる。女の人同士なのでよく見ている(談笑)。自分に合う服を探すのも大変だが、一目ぼれもあり、楽しい。自分の感覚を大事にしている。

③自身の顔について

鼻の正中線をまっすぐにする手術を受ける前に、それまでは顔の真ん中が凹んでいるような印象があったので、手術によって中高の印象にするが(鼻の下に他の部位からの皮膚を移植するので)傷が残ると説明され、顔の印象を優先させるか、傷を避けるかの選択に迫られ、中高の印象を選んだ。ところが、術後、新しい顔に違和感はかなり強く、主治医にそれをすごく訴えていた。何年も経って、今は違和感が消え、前の顔を思い出せないが、(鼻の下の)傷が気になる。その傷を隠すためのメイクをするようになった。以前は唇の形がなかったのでメイクをし難かったが、今はその形があるのでメイクできる。

④これからどんな化粧・髪型・服装をしたいか。

プライベートで旅行とか行けたら華やかなメイクとかしたいが、今は病気のこともあり、仕事をやっていくしかなく、保守的な職場なのでこのようなメイク(デザイン)しかできない。職場は、基本的にパソコン業務だが、内容は50人くらいの50-60歳代のおじさんたちのお世話をする仕事。また、自分は後ろに引いてしまうように見られがちだが、基本的に人と話すことが好き(なので今の職場もあっている)。(職場内では制服なので)、もうちょっと外勤の仕事が増えて、洋服とか楽しめるようになったらよいなと思う。雑誌とかでかっこいい業種の人を

見るとうらやましく思う(談笑)。

〈考察〉

化粧プログラム体験による意識・行動・性格特性の変化

本プログラムへの参加によって、体験後数か月間の化粧意識・化粧行動が増大し活発になることが示され、また、自由記述にある満足感の高さ(日比野、2010)と合わせて、対象者にはそれまでのよそおい行為への抵抗感を凌ぐ体験となったことが示された。

さらに注目したいのは、「調和性」の上昇という結果である。化粧や装いへの意識が高まり行動化することが活発になった女性たちは、温和、素直、寛大、親切、協力的といった項目からなる調和性という性格特性も高まっていた。この9名のデータのみで因果関係を推測することは拙速であるが、これまでの化粧に関する心理学研究の知見から、化粧が自己を慈しみ励ます行為(阿部、1994)と考えるなら、これを体験した女性が寛大で穏やかで素直な気持ちになり、他者に対して親切で協力的になるのも頷けることではないだろうか。

また、これについては、化粧行動意識尺度の「情報話題」が幾分増加している点も含めて考えてみる必要があるだろう。化粧について他者と話題にすることが若干増えたことが示されているが、この他者とは、対象者の自由記述からは主として母親・祖母等の女性の家族である(日比野、2010)。母親や祖母が患者の化粧顔を非常に喜ばれたエピソードは多くの参加者から報告されている。年頃の娘を持つ家族なら、日常的に娘の服装や化粧が話題に上ることはありふれたことだろうが、患者の家庭では本プログラムをきっかけに初めて話題に上がったという報告も聞かれる。母親と娘がよそおいの文化・習慣を共有し愉しむことを幸せに感じた経験は、穏やかで寛大な気持ちにさせるのかもしれない。

また、女性たちのよそおい文化は、思春期には同性の友人同士の中で共有され育まれるものと考えられる。この疾患の女性たちは、思春期も孤立しがちであり、またそのような外見についての話題を避けているので、ますます友人を作りにくく

なるという悪循環も推察される。本プログラム対象者が、今後職場やその他の集団で、他の女性たちと化粧や服装の話題を気軽に楽しむことができるようになり、その場の関係性が友好的になっていくことが期待できる。

2つの事例の検討

Aは、すべて母親が「コーディネート」した服装で育てられ、53歳に至ってもそれが続いている。結婚によっても母の支配から逃れることが達成されず、結婚後も仕事と育児に追われて、自己の課題と向き合うことなく中年期に至った。Aが30歳代半ばに唇裂口蓋裂の親の会の記念誌につづった文章は、当事者としての体験を通した内省ではなく、専門家として蚊帳の外からこの疾患を眺めたような、親切ではあるが他人事のような立脚点から書かれている。それからさらに数年後の、連日残業が続く日々の中での、化粧プログラム参加であった。その際施術されたメイクデザインの感想は、アイメイクが「タヌキのように」見えたというのだから、気に入らなかったのだろう。自己と向き合うレディネスが不十分なまま夫に進められての参加であり、出来上がった化粧顔も気に入らなかったのだから、本プログラムがAの自己の顔の受容に役に立っていなかったことが推察できる。夫の語りにあるように、傷も含めて自己の顔を引き受ける姿勢が未熟であることがその証左と考えられよう。ただし、10年のフォローの際には、Aは折しも職を辞し、長男も自立して家庭を去ることが見えてきた時期で、Aは自己の課題と向き合い始めており、この際に提示されたメイクデザインが非常に気に入って、能動的に自己の顔を受け容れていくことを化粧が支える可能性が示唆された。

Aの事例は、唇裂口蓋裂患者の親子はともに通院して治療を受ける期間が長いだけに、その絆が強すぎて、母親からの自立が成人期・中年期に模索されることもあるということを物語っている。また、この事例から、化粧プログラムが女性たちの自己受容に役立つためには、自己と向き合うレディネスが整っていることが前提であることも教えられた。

Bは幼いころから疾患を自覚するよう育てられ、職業的な同一性の確立を目指した女性である。20歳代半ばのBの文章には、幼少期より、障害を抱えて生きることを考え続け、種々のボランティア

活動に参加し、障害児者とその家族の幸福の実現を希求し続けてきたことが綴られている。思春期以降は、司法専門職に向けての両親からの大きな期待に悩んだ。このような歩みの途上、自己と向きあう作業のレディネスが充分備わった段階で化粧プログラムに参加したといえよう。

化粧プログラムの専門家による化粧施術と説明について、Bは「傷は傷として、それ以外のところにも目を向けるように誘ってくれるので、私もおしゃれしていいんだなという気になれる。」と語っており、画期的な快い体験となったようである。この体験が鼻の正中線をまっすぐにする手術をうける後押しにもなった。この手術によってもたらされた新しい顔の受容についても、化粧が大きなサポート役を果たしているといえよう。

本プログラム参加の後、Bは司法専門職への道を断念し、別の専門職に就くが病気のため辞職、と2度の挫折を体験したが、10年後のフォロー面接にに応じてくれた際には、穏やかではあるが毅然として自らのおしゃれについて語った。Bにとっておしゃれは「きちんとした」服を身につけることが重要で、矜持を保つことに繋がっていると考えられる。また、更衣室で他の女子職員からも、同様の指摘を受けているが、それを語るBは決して嫌悪感を表さず、むしろ談笑していることが注目された。プログラム参加前には、「(外出先の)トイレで化粧直しができない。」と訴え、外見やおしゃれに関心があることを他人に知られるのを恐れる心性が窺えたBの変化が確認され、日常生活における調和性の増大の現れとも考えられる。他の女性が自らのおしゃれについて関心を示してくれることをBは心地よく受け入れているようである。かつては「障害」に関する社会活動やそれに伴うネットワークを重視していたBが、このような同性同士の会話を楽しめる側面も備えた女性へと成熟したと考えられる。

日比野(2008)は、人と人との交流において、顔は「心の窓」であり、化粧は「心の窓を覆うカーテン」に喩えている。顔を通して心の中身(感情、思考、想像など)が伝わらないとコミュニケーションが難しくなるが、あふれ出るように伝わり過ぎると双方とも動揺して疲弊してしまう。化粧は「心の窓」である顔を覆って、適度に揺れて情緒を伝え、また窓の内を隠して内側(こころ)を護る

機能を果たしているといえよう。これは、横山(2004)が、適応のよい人のペルソナは「弾力性に富んだ防壁」と喩えていることに等しいと考える。化粧に限らず、服装や髪形などによる外見のデザイン・よそおいは、このような防壁の機能を持つものであり、同性集団で共有される文化・習慣でもある。Bがこの十年で身につけたものは、より弾力性に富んだ防壁(ペルソナ)であったのではないだろうか。

〈まとめ〉

筆者らは、唇裂口蓋裂の女性たちに、医療を補うものとして、自己の顔を受容することのサポートとして、社会生活をより適応的に生きてもらうために、化粧プログラムを提案し実施してきた。開始から10年経過したのを機に、2名の対象者の協力を得て、その長期的な効果を検討した。本プログラムが上記の役割を果たすためには、対象者が自己と向きあうレディネスを備えていること(本疾患の親子関係の性質上、この点が困難なケースが多いと考えられる)、また施されるメイクデザインは対象者の希望を取り入れた内容であることが必要と確認された。これらを前提として、化粧や服装のおしゃれが、患者の女性たちが自己の顔を受け容れ、より弾力性に富んだペルソナを創造することに貢献できる可能性が窺えた。

今後は、このプログラムに参加された他の対象者にもフォロー面接を行い、長期的な変化を展望して、よそおい(化粧・服装)の機能をより精密に追究したいと考えている。

〈文献〉

- 阿部恒之(1994) 化粧する心を探る：「化粧心理学」からの新しい視点 フレグランスジャーナル、22, 1, 68-74
 永福智志(2013) 顔ニューロンが紡ぐもの 山口真美・柿木隆介(編)顔を科学する 東京大学出版会 pp. 133-154
 Fantz, R. L. (1961) The origin of form perception. *Scientific American*, 204, 66-72
 Fields, T., Woodson, R., Greenberg, R., & Cohen, D. (1982). Discrimination and imitation of facial expressions by neonates. *Science*, 218 179-181
 萩尾藤江・日比野英子・楠本健司・国吉京子・山本一

- 郎・タミー木村・余語真夫(2005) 青年期唇裂患者に対する化粧の心理的効果と課題 日本口蓋裂学会雑誌 30、223
- 日比野英子・萩尾藤江・余語真夫・国吉京子・山本一郎・楠本健司(2005) 唇裂口蓋裂の女性の化粧行動と人格特性の検討 日本口蓋裂学会雑誌 30、222
- 日比野英子(2008) 化粧と心の内外(うちそと) 村澤博人(編) メイクセラピーガイド フレグランスジャーナル社
- 日比野英子・萩尾藤江・タミー木村・楠本健司(2010) 唇裂口蓋裂女性を対象とした化粧によるサポートの実践的研究 ―より適応的なペルソナの形成を目指して― 大阪樟蔭女子大学論集、47、105-117
- 日比野英子・萩尾藤江・楠本健司(2014) 唇裂口蓋裂女性への自己受容への支援 日本心理臨床学会第33回大会発表論文集
- 河原悦子(1991) 唇裂・口蓋裂児者の心理についての一考察 佛教大学1991年度卒業論文 未公開
- 京都口友会(1997) みんなで歩んだ口友会 二十周年記念文集
- 楠本健司(編)(2006) 待ってるよ赤ちゃん ―しんれつこうがいれつを持つ子どもを迎えるために 法蔵館
- 松井豊(1993) メーキャップの社会心理学的効用 資生堂ビューティーサイエンス研究所(編)化粧心理学 フレグランスジャーナル社
- Melzoff, A. N. & Moore, M.K. (1977) Imitation of facial and manual gestures by human neonate. *Science*, 198, 75-78
- 菅原健介(1984) 自意識尺度(self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究、55、184-188
- 和田さゆり(1996) 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究、67、61-67
- 横山剛(2004) ペルソナ 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕(編) 心理臨床大辞典 培風館